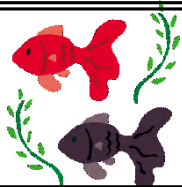


図書館だより



2021. 8. 31

発行：磐城高校図書館

高月祭古本市へのご協力ありがとうございました！



7月に行われた高月祭で、図書委員会は古本市を行いました。

来場者 122 人、売上冊数 186 冊という盛況のうちに終わることができました。

古本を図書委員会へ寄贈してくれた方も、当日買いに来てくれた方も、皆さんありがとうございました。

古本市の売上金(15,450 円)は図書委員会が図書館に入れる本を選ぶ【店頭選書】での資金として、活用します。後期に実施予定なので、またその時にどんな本を購入したのかお知らせします。

◆ 新着図書より ◆

『生きのびるための流域思考』 岸 由二／著

筑摩書房 ちくまプリマー新書 517-K

今夏は国内外で、水による大きな被害が出ました。日本は昔から水害が多く、様々な対応策が出されてきましたが、水害＝川という考えに囚われ、【流域】への備えがなっていないと著者は語ります。

本書における流域とは、降った雨を川の水に変換する大地の構造のこと。流域の基本や防災だけでなく、住環境や環境問題にも言及しているので、SDGs 11（住み続けられるまちづくり）や 13（気候変動対策）に興味のある人にもおすすめ。水と共に生きていくとはどういうことか、を考えさせられる一冊。

『リボルバー』 原田 マハ／著 幻冬舎 913-H

フランスのオークション会社に勤める冴の元に、一人の女性が品物を持ち込む。それは赤錆びた一丁の拳銃——『ひまわり』の作者ゴッホが、自殺に使用したものだというのが。拳銃は本物なのか。冴は真偽を見極めるため、ゴッホが晩年を過ごした地へと足を運ぶ。

美術史の隙間、ありえたかもしれない話を描き続けてきた原田マハが、別離に終わったゴッホとゴーギャンの関係性に新たな光を投げかけた感動作です。



『分水嶺 ドキュメント コロナ対策専門家会議』

河合 香織／著 岩波書店 498-K

副題にもあるように、2020 年 2 月～7 月までのコロナ対策専門化対策会議の動向を追ったノンフィクションです。組織の縛り、専門家同士の意見の衝突など、会議メンバーそれぞれの立場から語られる日々の混乱は想像以上。専門家たちの振る舞いに賛否両論あるでしょう。それでも、未曾有の禍を前にした奮闘は一読の価値あり、です。

小論文関連情報を載せた広報紙の発行を始めました。発行は不定期。

3 年生を対象に配布予定ですが、残部を図書館に置いておきますので、他の学年でも興味のある人は自由に持ち帰ってください。

今回のテーマは【時事問題】です。

新着図書リストは裏面→